The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	退職するにあたって
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪大学英米研究. 2020, 44, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

退職するにあたって

加藤　正治

私と外国語学部との直接的なつながりは、上本町8丁目にあった学舎の正門を18歳で通った時から始まる。卒業後そのつながりは一時途絶えてしまうが、28歳の時に今度は教員として再び正門を通った時に復活する。よもや母校で教鞭をとることになろうとは思ってもいなかったが、以来38年とうとう外国語学部を去る日がやってくる。赴任当時新米教員の私を温かく迎えてくださった先輩の先生方はもとより、その後同僚となられた先生方に対しても私が申し上げることができるのは「感謝」という言葉をおいてほかにない。そして外国語学部（あるいは大阪外国語大学（外大）といったほうが適切か）にはいくら感謝しても感謝し足りない。現在私が曲がりなりにも大学教員としていられるのは確実に外国語学部のお蔭である。30年以上もの間教員として私を置いてくれたからである。この場を借りて感謝申し上げたい。

振り返ってみると、優秀な学生諸君に囲まれて大変恵まれた教員生活であった。授業中に自分が話す事柄の内容を理解してもらえる、理解が難しければ的確な質問が返ってくる。そしてしばしの間ディスカッションがある。教員が幸せを感じる瞬間はいくつもあると思うが、これは間違いなくそのような幸せな瞬間の一つである。学生からの鋭い質問によって自分の考えが固定観念であることを教えられることもあったし、（恥ずかしながら）自分の知識がいかに不十分なものであったかを思い知らされることもあった。「学生諸君に育てられた教員生活」という一面があったことは否めない。統合以降は個人的な事情により外国語学部でそのような瞬間があまり経験できなくなって大変残念である。

退職間近になって様々な記憶が次々と胸中を去来する。退職された先生方の多くがおっしゃる通り浮かんでくるのは不思議と楽しい思い出ばかりである。嫌な思い出もあったはずなのだが、それも過ぎ去ってしまえば気にならなくなるのかもしれない。一方で、「楽しい思い出はもっと沢山あったはずなのだが」という思いもある。年齢とともに記憶が衰えていくことは仕方のないことであるが、大切なものを一つ一つ失っていくようで気分的には辛いものがある。今後は徐々に失われていく楽しい思い出を胸に生きてゆくことになるが、そのような楽しい思い出を有り余るくらい与えてくれた外国語学部に勤めることができたことは望外の喜びで、決して失われることのない記憶である。

上で述べたような恵まれた教員生活を送ることができたのはひとえに先輩の先生方、同僚の先生方、そして学生諸君からいただいた恩恵と激励によるものである。覚束ない足取りながらもなんとか定年までたどり着くことができたのは各方面の方々のお力添えがあってこそである。今はその幸せを噛みしめたいと思う。ここに長年にわたるご厚情に深謝するとともに、外国語学部のさらなる発展と飛躍を心よりお祈りして退職の挨拶としたい。